日本人に伝道する

２０１４年８月２９日
西九州伝道所
佐々木正明

信徒の時代に、「個人伝道」という勉強をしたことがあります。聖書学校に入ってからも「個人伝道法」の授業を受けました。それに関する本も、何冊も読んだものです。でも、はっきり言って、それらの学びと本が、目的どおりの役に立ったことはありません。

信徒の時には、いつでも聖書とクリスチャン文書を持ち歩き、機会を見つけ出しては個人伝道をしました。聖書学校に入ってからは、近くのバセドー氏病の専門医院へ行って院長の許可をもらい、3 年間にわたって毎週出かけて個人伝道を試みました。電車の中でも、バスの中でも、公園でも、道ばたでも、個人伝道をしたものです。有名な巣鴨のとげぬき地蔵が、聖書学校から徒歩の距離にったので、1 年ほど、毎週そこに通い辻説法と個人伝道もやってみました。

そのとき、外国人によって書かれた個人伝道の本や、外国人に教えられた日本人によって指導された個人伝道の方法は、まったくと言ってよいほど役に立ちませんでした。あえていうならば、関連する聖書箇所を覚え、暗記できたくらいです。

なぜそれが役に立たなかったかというと、そこで教えられている方法は、日本人の感覚からひどくかけ離れていたからです。欧米人ならばそれでいいのかもしれませんが、少なくても日本人の思考回路は違い、宗教的背景も感覚も、社会状況も、キリスト教に対する理解も、態度も、まったく異なっているのです。伝道の極めて大きな部分は、知識よりもこのような感覚、感情に関わるのです。その感覚、感情が日本人に合わないのです。

聖書学校を出た年、出版部の手伝いをさせられ、アメリカ人が書いた個人伝道の本の出版に関わり、その本の感想文を書かせられたことがあります。私は正直に、このような異文化の人が書いた個人伝道の本は、日本人には益がないと書いたのですが、これでは折角出版する本の販売に悪影響となると判断されて、お叱りを受けてボツにされたことも記憶しています。

フィリピンの山岳奥地で宣教師をしていた頃、おんぼろ車の車輪のナットが外れて、無くなってしまったことがありました。のろのろガッタンゴットンとしばらく行って、道端のパンク修理屋の掘っ立て小屋に立ち寄って、何とか同じサイズのボルトを見つけ出して締めようとしました。ところがどうしてもうまく行きません。同じ太さには違いないのですが、規格が違うのでしょう。螺旋の込み具合というか、繊細さが違って、かみ合わないのです。（フィリピンではインチの規格とセンチの規格の、ナットとボルトがあることを、後になって知りました。）

私たちの個人伝道は、規格の違うナットを無理やりに嵌めて、締め込もうとしているようなものです。ナットの螺子（ねじ）山が崩れるか、ボルトの螺子山がつぶれるのが先かです。西欧を渡って来たキリスト教は、日本文化というボルトを悪者扱いにして、ナットに合うボルトを変えようとしてきました。その結果、キリスト教は日本文化に敵対するものと見られ、排斥されてしまいました。日本の集団主義というか、共同体主義を、「伝道の妨げになる悪」と決め込んで、西欧並みの個人主義を定着させれば、日本の伝道、とくに個人伝道は成功すると考えた人は多いようです。日本の共同体主義の頂点は、天皇制だと言って、天皇制を取り除かなければならないと説く、過激なクリスチャンたちも少なくありませんでした。個人伝道というのは、個人主義を前提とした伝道なのです。

たしかに、日本もある意味で個人主義になりつつあります。しかしそれは、民主主義の理念がかなりしっかりとした欧米の個人主義のようなものではなく、ただ、しがらみだらけが根強く残る地方の共同体意識に嫌気がさして、逃げ出すだけの個人主義、身勝手主義に過ぎないのが日本の個人主義です。これでは伝道の道を整えたことにはなりません。個人伝道がしやすくなったわけでもありません。

伝道のために日本文化を変えようという試みは、日本人の気持ちを逆なでし、結局は敵に回すこととなり、日本の伝道をかえって難しくしています。私たちは持ち込むナットを大切にしてボルトを変えるのではなく、持ち込むナットの形を変える必要があります。ボルトに合ったナットを捜すか作り出すのです。もちろん、キリストの教えそれ自体、聖書の教えそのものを変えてはなりません。西欧文化に合わせて作られたナットを、日本文化に合わせて作り直すだけです。

そういうわけで、これまでに述べてきたことを念頭に置きながら、誰にでもできる伝道を考えて見ましょう。個人であるかどうかは抜きにして、ごく普通の日本人が相手です。

☆　☆　☆　☆

すでに取り扱いましたが、はじめから、キリストの話を持ち出し、罪だの悔い改めだの、贖いだの、十字架だのという話をするのはやめましょう。まったく効果が無いとは言いませんが・・・・蓼食う虫も好き好きですから・・・。でも、良い結果を望むのはおおよそ困難です。キリスト教を胡散臭い外国の宗教とみなしている人や、イエスが姓でキリストが名だなどと考えている人が多い日本では、そのような伝道に効果を期待することのほうが、間違っているのです。

まず、伝道しようと思っているあなたが、最初から伝道することなど「あきらめて」、もっと初歩の「証」をすることから始めるのが良いでしょう。それも、最初から「キリストを信じたら救われました」などという、日本語ではない日本語を話すおかしな人種であることをやめて、普通の日本語を話す普通の日本人になる、「自己改革」からはじめましょう。周囲の普通の日本人を「世的な人々」と見下す態度を改め、彼らと一緒に生きるクリスチャンとなりましょう。

だれとでも付き合いやすいクリスチャンになることが、第一です。映画は観ない、カラオケには行かない、パチンコは大嫌いのクリスチャンも、それはそれですばらしいところもあるのですが、それが、周囲の人々との距離を広げて隔てを作り、付き合いを薄くしてお話をするきっかけをなくしているのなら、神様のすばらしさを証するために、積極的に距離をせばめて隔てをなくす努力をしましょう。彼らも永遠のいのちを持つことができることを願い、映画も観ましょう。カラオケにも行きましょう。パチンコもやってみましょう。ただし、すべて、ほどほどにやってみることです。私たちはこの世に生きているのです。ただし、この世に属するものではないことを、忘れてはなりません。

近所の葬式に出ないクリスチャンは、お隣さんと痛みを共有できない人で、世の光としては失格です。親族の法要に列席しないクリスチャンは、血縁者と悲しみを共にできない人間で、キリストの弟子としては失格です。秋祭りにも春祭りにも加わらないクリスチャンは、人々と一緒に喜びを分かち合えない人物で、味気を失った塩です。お酒が出るからといって、友人や同僚の結婚式に出ないクリスチャンは、少なくても、カナ村の結婚式に出て、不足したぶどう酒を秘密のうちにたくさん造ってまで、喜びを共にしたキリストの弟子ではありません。

まず、一緒に生きている者になることです。一緒に生きているという感覚ができて、はじめて、心の通う話ができるからです。

次に、痛みや苦しみ、悩みや問題を、聞いてあげられるクリスチャンになることです。それは、自分自身が悩んでいること、悩んできたこと、戦いながら生きていることを隠さ

ない生き方をすることです。「クリスチャンがこんなことではいけない」と頑張りぬくのも結構ですが、かえって苦しみ、悲しみ、悩み、涙を流していることが、知られたほうがいいのです。

「クリスチャンは証のために、良い生活をしていなければ。いつも喜んでいなければ。どんなときにも毅然としていなければ」という感覚は、あながち間違っていませんが、無理をし過ぎです。クリスチャンの鏡のように言われるダビデ王さえ、嘆き、悲しみ、泣き、叫び、狂おしいまでに痛んでいました。それでいいのです。ただ大切なのは、そのような中でも倒れない、倒れたように見えても立ち上がることです。それが信仰によって生きることです。

人々が、「悲しみも苦しみも知らない人」として、あなたを畏敬の念をもって見るのではなく、多くの悲しみと痛みを乗り越えてきた人として、親しみをもって見るように仕向けるのです。悲しみも苦しみも寄せ付けない人は立派です。でも人間味に欠けます。悩むことも痛むことも無いように振舞っているクリスチャンは、偽善者に見えて、誰も近づこうとしません。証をしたいと望むクリスチャンが最初にすべき大切なことは、近づきやすい人間に、同じように生きている人間になることです。

「あの人なら、自分の苦しみを分かってくれるに違いない」、「あの方なら、自分の悲しみを理解してくださるに違いない」と思われ、相談を受けるような人間になることです。多くの人は苦しみを抱えています。外見はどうあれ、悲しみを秘めて生きています。そして、どこかでそれを吐き出したい、誰かに聞いてもらいたいと望んでいます。でも、聞いてもらえる人がいないまま、悩みの中に沈んでいます。

そこであなたが、悩みをたくさん体験し、悲しみを嫌というほど舐めてきた人として、近くにいてあげるのです。いつも幸せいっぱいのノー天気なクリスチャンではなく、痛みをこらえ、苦しみと格闘し、問題に立ち向かい、あるときは呻き、あるときは涙をながしながらも、絶対にくじけない人、絶対に倒れてしまわない人、絶対に負けない人、必ず笑顔で立ち上がる人として、近くにいてあげるのです。

人は、自分の悲しみや苦しみを取り除いてくれる人を求めてはいません。そんな人がいるとは思っていないのです。でも、話を聞いてくれるだけでいいのです。心から同情してくれる人を探しているのです。悲しんでいる人は、同じように悲しんだことのある人を探して、話を聞いてもらおうとします。苦しんだ人は、似たような苦しみを味わってきた人を見つけ出して、話をしたいのです。

ただ、悩みや苦しみ、痛みや悲しみを、自分から話し出す日本人はあまりいません。よほど親しくなった相手なら別ですが、普通は黙って耐えているのです。そこで、自分が苦しんだことに恥ずかしさを感じていないクリスチャン、自分が悲しんだことに後悔をしていないクリスチャンが、自分から話し出してみるのです。地域の当番でしばらく一緒に仕事をした後、葬式の手伝いで忙しくした後、いつでもいいのですが、少し一緒に動き回った後に、「私も苦労が多くてですねー。実は、ずいぶん大変だったことがあるんですよォ」と話し出してみるのです。

すると、それが呼び水となって、自の苦しみや悲しみを、話し出す人が出てくるのです。すでに解決した古い話ではなく、今体験している生々しい話、いまその中にいてもがき苦しんでいることが出てくるのです。それに対して、心から大きく頷いてあげることです。「そうだったの。あなたもたいへんだったネ」「苦労したんだネ」「よくここまで耐えてこられましたネェ」と合いの手をいれて、聞いてあげることです。あまりしつこく聞き出そうとしたり、「こうすればよかったのに・・・」と、物知り顔をしたりせずに、どこまでも、同情をもって聞いてあげることです。

ここで、「イエスさまはね」とか「神様は・・」とか、勢い込んで話してはなりません。ある種の魚は、餌の中に釣り針が隠されていると気づくと、絶対に食いません。親切に見えるあなたの態度に、「宗教の勧誘」という下心を見つけると、人は警戒してしまいます。また、何人もの人が聞いている中では、本当に心を開いて何もかも話してしまうような人はまずいません。ですから、この様な場合、ほどほどで話を切り上げるのが得策です。

「本当に、大変だったんですね。私もずいぶん苦労をしてきたけれど、あなたの忍耐には尊敬に値します。 今日はゆっくりとお話はできませんが、いつでも、遊びに来てください。よければ、お茶でも飲みながら、ゆっくりお話を聞かせてください。お話しするだけで、ずいぶん楽になって、おのずと道が開けることもあるものですよ」という程度で、お別れするのがよいでしょう。

そして、次の機会を待つわけです。どこかで偶然会って挨拶をし、話を始めるのも良いでしょう。自宅に招くのも良いでしょう。そして、もっと個人的に話を聞いてあげるのです。たくさん同情し、たくさん合いの手を入れ、相手がやったこと、相手の生きてきた生き方が、どんなに愚かに見えても、どれほどバカバカしく、自業自得に見えたとしても、それを口に出さずに、聞いてあげることです。「こうしたらよかったのに」というのは禁句です。「それはあなたが悪かったのよ」と言うのも、「それはあなたの間違いだったネ」というのも、この時点では時期尚早です。

ここではあくまでも、悲しんでいる人、苦しんでいる人に同情して心を寄り添わせることが重要です。心から同情してくれる人を、人は「私のことを分かってくれた人」として、受け入れ、大切にし、その人の言葉を聞き入れるのです。

「私も、あなたの悩みほどではないし、あなたの痛みほどではないかもしれないけれど、ずいぶん苦しんで来たものよ。親の反対を押し切って結婚したのに、毎日が DV の連続で、とうとう離婚もし、シングルマザーになり、カードの借金返済に死ぬ思いをし・・・・・、色々たくさんあって・・・・。でも、今は何とか立ち直っています。本当に何とかの状態ですが、ここまでになれたことを本当に喜んでいます。別にいい解決の方法があったとか、得策が見つかったというわけではないし、努力したというほどのことも無いのですが、私の場合は、神様にお願いをしたんです」と、遠慮がちに自分の体験を話し出すのがいいでしょう。

ここで、相手の気持ちを探らなければなりません。あくまでも、自分の体験として話すようにすれば、つまり、宗教の勧誘としてではなく、一人の悩み抜いた人の体験として話すならば、聞いてもらえることが多いのです。宗教の勧誘ではなく、ひとりの悩み抜き、苦しみぬいた人間の体験として、「このような話を聞いてもらえるでしょうか」と言って、お話しすることです。いままで、涙ながらの相手の話を、同情心いっぱいに、真剣に聞いてきてあげましたので、今度はあなたの話を聞くことができる気持ちにも、なっていることでしょう。

そこでいくつかの点に注意しながら、証を続けます。この時点では、あくまでも、自分の体験談で、勧誘ではないと思えるような話し方をします。

① キリストという名を持ち出さず、自分は神様にお願いしたとお話をします。キリストというと、尊敬を抱く人もいますが、違和感と警戒心を持つ人や一歩引いてしまう人もいます。

② その神様は、昔から日本にいてくださり、日本の国土を祝福し、日本人を祝福してきてくださった神様であることをお話します。太陽を昇らせ、雨を降らせ、作物を育て、動物を生かし、私たちを生かしてくださっている神様ですと、説明してあげます。神様、神様と言うと、「その神様ってどんな神様？」とか、「どんな宗教の神様？」と尋ねられるかもしれません。そのときは、聞いている人の知らない神様ではなく、聞いている人が心の奥底でずっと感じてきた神様であることを話すことが大切です。宗教を変えるとか、信仰を変えるという心配を取り除きましょう。

③ その神様は、たぶん、お話している人が、心の中で感じ、信じてきた神様であることをお話ししましょう。多くの日本人は、自覚してはいなくても、実は目に見えない唯一の神様を敬ってきた可能性が高いのです。それを自覚させてあげましょう。日本人は、その神様を良くは知らないまま、色々な名前を付けて崇め、祀り、称え、感謝を捧げ、祭りを行ってきたこと説明してあげます。

④ その神様は、また、日本だけの神様ではなく、世界の神様、世界にただお一人の神様であることをお話します。キリスト教の神が世界の神、唯一の神なのではなく、昔から日本人が知らずに崇めてきた神、悩みを語った人が、良くはわからないまま心の中で感じてきた神様であることを伝え、この神を私たちは「天地創造の神様」、あるいは「天の父なる神様」と呼んでいることを、教えてあげましょう。

⑤ もし、神様についての質問が出なかったら、神様についての説明は、この時点ではする必要がありません。ただ、自分は神様にお願いしたら、神様が聞き届けてくださり、助けてくださったという事実を、明確にお話しましょう。助けられた様子、内容、どんな具合だったのがどのようになったのか、生き生きと、ただし、手短に伝えましょう。

⑥ もしも相手の人が、興味を持って聞いていてくださるようだったら、「あなたも、この神様にお願いすれば、この神様はきっと聞届けてくださるはずですよ」とお話しするのです。ここでは確信に満ちた言い方をしましょう。でも、押し付けがましくなく、宗教の勧誘でもなく、悩み痛んでいる人への同情として語りましょう。

「信じましょう」とか「信仰を持ちましょう」という言い方は、この時点では混乱を増すだけです。「お願いしましょう」と進めるのが最善です。お願いするという行動は、信じることです。たとえわずかながらでも、そこに、信じるという要素があります。信じるから頼み、信頼するからお願いするのです。

⑦ 次に、お祈りすること、つまり、具体的にお願いすることお勧めします。でも、あまり急ぎすぎてはなりません。まず相手に「神様にお願いしてみたい」という心を起こさせることが肝要です。「私もしてみたことだけど、ぜひお祈りして、おねがいして御覧なさい」と勧めて見るくらいでよいでしょう。

⑧ 聞いている人が、興味を絶やさないでいることを見届けたら、次にステップに進みましょう。でも、興味が途絶えたようだったら、深追いはせず、次の機会を待つことです。次のステップは、お祈りの仕方を教えて、一緒に祈ってあげることです。「間違いのないように、きちっと神様の名前を呼んでお祈りしましょう。私たちの神様

は、天と地をおつくりになった神様ですから、『天と地をお造りになった神様』と呼びかけてから、自由に話しかけ、お願いしましょう」と指導してあげることです。

⑨ 相手の人が、あなたはクリスチャンであることを知っているなら、キリストとの関係などをたずねられるかも知れません。でも、まだキリストについてお話をするのは控えておきましょう。そのような話に入っていくと、難しくなりすぎて、問題を解決してもらうという大切なこと、神様にお願いするという一点がぼけてしまいます。キリストについての知識は、神様の助けを得るための絶対必要条件ではありません。神を信じること、すなわち神様に信頼してお願いすることが、絶対必要条件なのです。キリストのことを知らなくても、神様がご存知です。神様は、キリストのことを知らなくても救われることができるように、キリストの十字架を立ててくださったのです。キリストについてお話し、キリストのみ名によって祈ることを教えるのは、次の機会にしましょう。

このようなステップで証をすると、私たちが通ってきた苦しみも、私たちが味わってきた悲しみも、私たちが犯してきた失敗も、私たちが積み上げてきた恥も、みな、神様の救いを伝える大切な働きの、大きな力になるのです。

私たちがこの世に留まり、多くの人たちと同じように苦しむのは、キリストが苦しみを通して救いを完成してくださったように、私たちが私たちの苦しみを通して、キリストの苦しみの救いを伝えていくことができるためなのです。